

人びとの平和を願^{ねが}つて歩^{あゆ}む庭野日敬

大きな かしの木 物語

岡本文良・作
高田勲・画



人びとの平和を願って歩む庭野曰敬

大きな かしの木 物語

岡本文良・作 高田 勲・画



岡本文良 *おかもと ふんりょう

1930年茨城県生まれ。東京大学文学部卒。
出版社勤務ののち作家になる。インド仏蹟
訪問2回。主な著書に『如幻アショーカ』
(スタジオVIC刊)『シャカと天女と神の
国』(あかね書房刊)『秋子のゆくところ』『秋
子の白い朝』『愛の島に星がきらめく』(以上
あすなろ書房刊)『ばらの心は海をわたった』
(PHP研究所刊)『なぞの女王と少年のゆ
め』(佼成出版社刊)など多数。

高田 勲 *たかだ いさお

1938年島根県生まれ。日本美術家連盟会員。
白磔会同人。出版美術、商業美術など、さ
まざまな面で活躍中。著書には『わたしは
ふたつにわれない』(さえら書房刊)『みどり
の大地はわが心』(PHP研究所刊)『なぞの
女王と少年のゆめ』(佼成出版社刊)など。

大きなかしの木物語

NDC-916 240P 23cm

人びとの平和を願って歩む庭野日敬

昭和61年10月1日 第1刷発行

昭和61年10月5日 第2刷発行

作 者 岡本文良

画 家 高田 勲

発行者 古川忠司

発行人 株式会社 佼成出版社

〒166 東京都杉並区和田2-7-1

電話 03-383-3151(代) 振替東京7-761

印刷所 日本写真印刷株式会社

佼成出版社印刷部

製本所 大口製本印刷株式会社

©岡本文良・高田 勲 1986 Printed in Japan

落丁本・乱丁本はおとりかえます

ISBN4-333-01235-X C8093

もくじ

● 大きなかしの木物語 ●

人びとの平和を願って歩む庭野日敬

1 雪深い山のふるさと

はすの見ている学校 6

ふるさとと祖父 13

父と母 20

ふくらむ夢 27

肩にあいたあな 34

東京へ 42

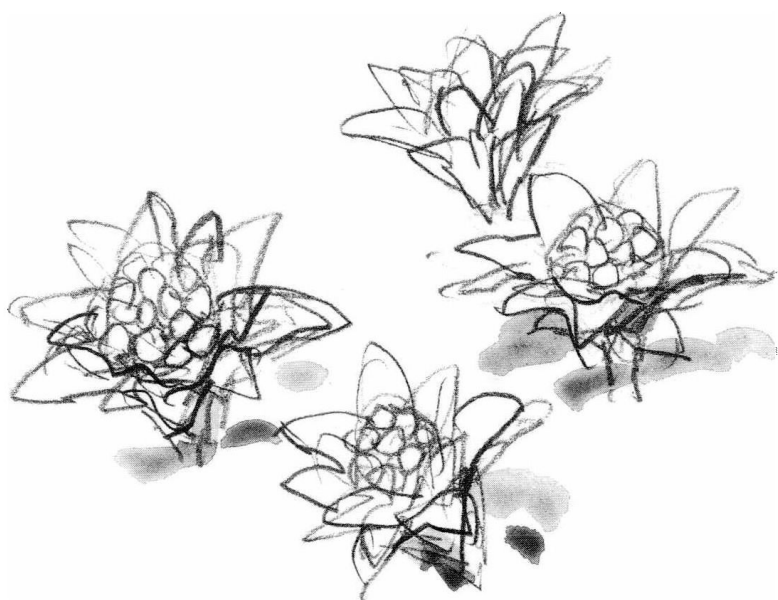
母の死 50

2 あら波をのりきつて

縁日のできごと 56

そそられた好奇心 62

海軍 69



3 かずかずのめぐりあい

店と結婚

77

生かされている命

84

ふしぎなこと

91

迷う心

96

一つの病氣から

104

恩師・新井先生

111

修行するおシャカさま

117

ぼだい樹の下の悟り

124

霊鷲山と法華経

129

照らしだされた道

137

運命の出会い

143

ひとり立ち

151

めまぐるしい日々

158



4 霊鷲山^{りょうじゆせん}への遠い道のり

暗い時代へ

164

おどろきの神のお告げ

169

杉並区^{すぎなみくわだ}和田本町^{ほんちやう}

176

試練^{しれん}の階段^{かいだん}

183

別れ別れ

188

戦争のあと

196

帰ってきた家族^{かぞく}

203

第二の階段^{かいだん}

209

生ある者はかならず

213

むくわれた努力

218

大聖堂^{だいせいどう}と霊鷲山^{りょうじゆせん}

223

世界にはばたく

231



装幀 加藤精一
写真 小林謙介

足利孝二

人びとの平和を願^{ねが}つて歩^{あゆ}む庭野^{にわの}曰^い敬^{きょう}

大きなかしの木物語

岡本文良・作
高田 勲・画

1 雪深い山のふるさと

はすの見ている学校

青々した山のふところに、きれいな水のわきでる池がありました。直径二百メートルぐらいの丸い池で、大池おおいけとよばれていました。

大池には、夏になると、まるで水の精せいのような、美しいはすの花がさきます。水面にうかんだ大きな緑の葉のあいだから、赤やピンクや白の花が、によきによきとでて、気もちよさそうに開いているのです。

池の前に、大池尋常おおいけじんじょう小学校が建っていました。毎朝、筒つつそで着物を着て、わらぞうりをはき、ふろしき包みをかかえた子どもたちが、元気に、通います。

はすの花は、その子どもたちをむかえて、

「きょうもがんばろうね」

と、ほほえみかけているようです。

鹿蔵も、そのはすの花にむかえられて、大池おおいけ小学校に通った子どものひとりです。

大池小学校は、生徒の数が少なく、先生もふたりしかいないという、小さな学校でした。

三、四、五、六年生を一つの教室にいっしょにして校長先生が教え、一、二年生をいっしょにしてもうひとりの先生が教えていました。

鹿蔵は、一年生から二年生まで、太田おおたジツという、若い女の先生に教わりました。

太田先生は、色が白く、目がぱっちり、ほほがふつくらしていて、きれいな人でした。髪かみを丸まるくふくらませてゆい、明るい着物を着て、えび茶色のはかまをはいていました。近よると、おしろいのいいにおいが、ぷーんとしました。

鹿蔵は、一年生になったときから、太田先生がすきになりました。

新しい一年生は、みんなで十二人でした。その中で、鹿蔵はいちばん大きく、二年生のいちばん大きな子もかなわないくらいでした。

「うわあつ、鹿蔵は大きいのねえ」

はじめてならんだとき、太田先生がわらっていいました。鹿蔵は、ほめられたと思って、うれしくなりました。



校長先生は、大海伝吉だいかいでんきちという人で、めがねをかけていました。

そのころのおとなたちが、たいてい着物を着てぼうず頭なのに、校長先生は洋服を着て、髪の毛のぼしていました。それをきれいにわけていました。

子どもたちは、そのことだけで、校長先生をりっぱな人だなあと尊敬そんけいしました。

校長先生は、三、四、五、六年生を教えるだけでなく、ときどき、一、二年生の教室にもきて話をしました。

「人には、親切にきなさい」

「神さまや仏さまは、かならずおがみなさい」

その二つのことを、きまって教えました。鹿蔵しかざうは、そのたびに、それを守ろうと心にきめました。いつでも、人のために役に立とうと思っていました。

そのため、まだ小さいときから、田んぼへおちた子を急いでかけていって助けてやったことがあります。

あるとき、一年生が、教室の中で、たがいにみんなの顔を見くらべながらさわぎだしました。

「なんだか、へんなにおいがするぞ」

「ほんとだ、うんこのようなにおいがするぞ」

みると、ひとりの子が、いすにすわったまま、おかしい腰こしつきをして、泣なきだしそうになって

いました。みんなは、さっと、その子のしたことを知ってしまいました。

さあ、たちまち大さわぎです。わざと鼻をつまんで顔をしかめてみせたり、そばまでいってか
らかってみたり……。かわいそうに、その子は、ますます情けない顔をしてべそをかくばかりで
す。あいにく、太田先生はまだきていませんでした。

そのとき鹿蔵が、すうっとその子のそばへよっていきました。着物のすそをとって、おしりを
まくりまします。べつたりと、くさくて黄色い物がついていました。鹿蔵は、少しもいやがらずに、
新聞紙やぞうきんを使ってそれをきれいにふいてやりました。

太田先生がはいってきました。先生は、鹿蔵のしたことを知って、すっかり感心してしまいま
した。

「鹿蔵、ありがとう。鹿蔵は、えらいわねえ。先生、うれしいわ」

でも鹿蔵は、校長先生に教えられた親切をしようとして、そのようなことをしたわけではありません。
せん。鹿蔵は、家に小さな弟がいて、ときどき同じようなことをやっていました。それでその子
にも、なんでもないことのように思っていてやったのです。

鹿蔵は、小さな子がいじめられて泣いていたりしたときも、いじめた子をさがしだして、
「弱い子を、なぜいじめるんだ」

と、やっつけたりしました。

いじめっ子も、心の底では、悪いことをしたと思っています。そのため、鹿蔵が勇気をだして向かっていくと、鹿蔵より年上の子でも降参こうさんしてしまします。

神さまや仏さまをおがむという、校長先生の二つめの教えの方も、毎日実行しました。

家にも、神だなど仏壇ぶつだんがあつて、祖父そふと両親がよくおがんでいました。鹿蔵も、そのまねをして、神だなの前でかしわ手をうったり、仏壇ぶつだんに線香せんこうをあげたりしはじめたのです。

神だなにはたくさんのお札ふだが、仏壇にはたくさん位のい位はいいが、あがつていました。

ふしぎなことに、おがんでいると、その中にすがたの見えない神さまや仏さまがひそんでいるように思えてくるのでした。

鹿蔵には、三つ年上の兄がいて、いっしょに学校へ通っていました。

「鹿、早くしろ。学校に遅刻ちこくするぞ」

兄は、毎朝のように鹿蔵をせかします。でも鹿蔵は、神さまや仏さまをおがんでからでないと家をでられないようになっていました。

「ちよつとまって。すぐにすむから」

でも兄は、まちきれずに先にいきます。やがて鹿蔵も、そのあとを追つて、ばたばたと走つていきます。

学校までは、約一キロ——、まがりくねった山道がつづいていました。途中とちゅうに、村の鎮守ちんじゆさま

の諏訪神社すわじんじやがあり、その前を通つていくと、がけが切り立っていて、「大日如来だいにちによらい」とほった岩があります。

がけの反対がわは、深い谷です。これまでに、おちた人もいました。「大日如来」は、これからはそういうことがないようにと、そこを通る人を守ってくれる仏さまでしよう。

そう思うと、鹿蔵しかざうは、その仏さまもおがんでからでないと通る気にはなれません。

学校に近くなると、赤い鳥居とりいの大池おおいけの弁財天べんさいてんが立っています。そのそばには、石にほった仏さまもあります。

鹿蔵は、その二つもおがんで通ります。学校におくれそうになっても、それだけはやめません。

「鹿、おまえはへんな子だなあ」

兄がいました。

「鹿蔵は、おかしな子だなあ」

ほかの子たちも、みんないました。

夏になると、大池のはすの花も、そういう鹿蔵を見つめていました。うれしそうなほえみをうかべながら……。

ふるさとと祖父^{そふ}

鹿蔵^{しかぞう}は、新潟県中魚沼郡十日町^{にいがたけんなかうおめぐんとおかまち}（現在の十日町市）の菅沼^{すがぬま}というところで、明治三十九年十一月十五日に生まれました。

父の名は庭野重吉^{にわのじゆうきち}、母の名はミイといました。

鹿蔵は、そのふたりめの子で、あとから、三人の弟とひとりの妹が生まれました。

十日町は、日本一長い信濃川^{しなのがわ}にそっていて、むかしから織物の町^{おりもの}として知られたところです。

でも、鹿蔵の生まれた菅沼は、町の中心から南東の方向に六キロもはいた山の中にありました。ノウサギやムジナがすんでいるところで、鹿蔵が生まれたころには、四十二戸の農家が、少しづつあいだをおいて、ぼつんぼつんと建っていました。

鹿蔵の家は、そのいちばんはずれにありました。カヤぶき屋根の母屋^{おしや}と板屋根の二階屋があり、裏^{うら}の方は、谷間^{やま}がのぞめるような深いがけになっていました。

家には、鹿蔵^{しかぞう}たち親子のほか、祖父^{そふ}の重太郎^{じゅうたろう}や、父のお兄さんの一家もいっしょに住んでいました。そのため、多いときには、家族が十四人になったときもあります。

しかし、一家は仲むつまじく、よその家にもめごとがおこるたびに、

「ほら、重左衛門^{じゅうざえもん}の家を見ならえ」

といわれたほどでした。重左衛門というのは、鹿蔵の家の屋号です。

十日町^{とおかまち}は、雪の多い新潟県^{にいがたけん}の中でも、とりわけよくふるところとして知られています。冬になると、ふりつもった雪が、二メートル、三メートルと高くなります。

人々は、一年間の三分の一をその雪にとじこめられながら、じいっと春をまつのです。

鹿蔵は、まだ四つか五つのころ、雪がふりだすと、祖父によくスキーをつくってもらいました。細い竹をならべ、それに針金^{はりかね}を通してつないだスキーでした。

ころびながら遊んでいると、そのうちに、着物のすそにつららがさがって、ぶるぶるとふるえだします。手の甲^{こう}がむらさき色になり、指先も冷たくて動かなくなってしまうです。

祖父は、そういう鹿蔵をつかまえて家の中に入れます。

「ばかなやつだなあ。こごえてしまうぞ」

そういって、鹿蔵をくるりとほだかにすると、着ている綿入れ^{わた}と背中^{せなか}のあいだに入れてくれます。肌^{はだ}から肌へと、祖父の体のぬくもりが伝わっていい気もちです。